慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : N. Wade著 "Psychologists in word and image"
Sub Title	Wade (1995)'s Psychologists in word and image
Author	桐谷, 佳恵(Kiritani, Yoshie) Brožek, Josef
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.43 (1996.) ,p.45- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000043-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：N. Wade 著 "*Psychologists in Word and Image*"

桐　谷　佳　惠*・Josef Brožek**
Yoshie Kiritani

The main aim of the book, as was the aim of an exhibition at the International Congress of Psychology held in Brussels in July 1992, is to "encapsulate the history of psychology graphically". One hundred four scientists who contributed to psychology are presented as perceptual portraits. The portraits contain motifs that represent ideas or issues which they discussed. The portraits involve a variety of visual effects; some of them may serve as examples of visual allusions. This is an interesting introduction to the history of psychology.

本論文は，N. Wade 著 Psychologists in Word and Image を紹介するものである。同書は，1995年5月に The MIT Press (Cambridge, MA, USA and London, England) から出版された。総ページ数は240ページで，図版104枚が含まれている。以下，簡単な著者紹介の後，同書の趣旨，構成等を紹介する。

著者について

著者，Nicholas Wade は，スコットランド，Dundee 大学の視覚心理学の教授である。運動残効などの視覚現象を研究するだけでなく，視覚科学と芸術とのかかわりを追及し，自らも作品を制作，ヨーロッパを初めとして多くの国で展示会が開かれている。日本でも，朝日新聞に作品が紹介され（坂根，1982），1984年から1985年にかけての同社主催の展示会に出品されている（坂根，1984）。このテーマを扱った2冊の著書，*The art and science of visual illusions* (Wade, 1982) と *Visual allusions pictures of perception* (Wade, 1990) は，いずれも邦訳されている（ウェイド著，近藤・原口・柳田訳，ビジュアル・イリュージョン　芸術と心理学の融合，1989；ウェイド著，近藤訳，ビジュアル・アリュージョン　知覚における絵画の意味，1991）。また，*Japanese Psychological Research* の特集号 Gestalt Perception II では，故 G. Kanizsa の肖像が Wade 独特のスタイルで発表されている (Wade, 1995)。さらに彼は心理学史にも精通しており，立体視研究における2人のパイオニア的研究者についての著書，*Brewster and Wheatstone on vision* (Wade, 1983) も発表している。このように著者は，心理学の世界で幅広く活躍する3つの顔をもった認知科学者である。

同書の趣旨

この本の出版のきっかけとなったのは，1992年 Brussels で開かれた International Congress of Psychology での展示会であった。したがって，本の目的は展示会の目的と同じであると言っても差し支えはなかろう。Wade は，この目的を "to encapsulate the history of psychology graphically (p. *xi*)" と述べている。展示会では，歴史的に心理学の分野で活躍した人物の，その研究精神や研究活動を表わすような肖像画が50枚展示された。

この本の中で Wade は，人物を生誕年順に並べることにより，心理学史を捉えようとしている。心理学の研究領域は多岐にわたり，各領域の中でさまざまな理論が主張される。Mecacci (1994) の言うように，ある領域で生まれた理論は，その領域内でのみ妥当性が検証されるの

* 日本学術振興会特別研究員
** Lehigh University
Wade 教授と日本との関わりについて，情報を提供して下さった北九州大学の近藤倫明先生と慶應義塾大学の坂根巌夫先生に感謝いたします。

であり，異なる領域間で理論の優越を比べることは不可能である。この心理学の多次元的側面は，psychology という言葉の中にも現われているという (Vicario, 1994)。psychology の psycho は，ギリシャ語の *psükhée* に由来する。この言葉には多くの意味があるが，代表的なものとしては，生命実体と個人の気質という 2 つがあげられる。前者は，生命体という言わば機械を動かす原動力であり，後者はパーソナリティや行動パターンに相当する。このように，語源的にみても，心理学の興味の多様性は明らかである。Wade は，これを“昆虫の眼のように (p. *xiii*)”と表現する。彼は，学問に貢献した人物を生誕年順に列記することで，一次元に整理されない心理学史の特徴をよく表現している。

この本に紹介されている人物は，総勢 104 名，うち，Wundt 以前の者が 39 名含まれている。彼等は，知覚的肖像画と称される特別な肖像画とともに，解説されている。これは，グラフィック技術や写真技術を駆使して作られたもので，その技法の詳細は，前述の著書，*Visual allusion pictures of perception* に詳しく紹介されている。

知覚的肖像画は，通常の肖像画（あるいは写真）とモチーフと呼ばれる別の図からなり，全体としてある視覚効果を生む 1 つの作品である。つまり，2 つの絵が統合されて，1 つの絵となっており，中にはモチーフの絵が強力すぎて，肖像画がわかりにくいものもある。そのようなとき読者は，どんな顔が描かれているのかを知るために，本を遠ざけたり，視線を絵から外したりせねばならない。

モチーフとなっている絵は，その研究者の主義主張や研究態度，つまりは心理学に対する貢献を表わす。具体的に述べると，著書の挿絵や文章が最も多く，全モチーフの約半数を占める。引用でない場合は，主張や研究対象の現象，発見された効果などを，Wade が視覚的に表現している。たとえば，Pavlov の紹介では，彼が犬の条件反射に用いた装置がモチーフであり，Delboeuf では肖像画に眼鏡がかけられ，それが同心円錯視になっている。また，心理学史上関連のある人物同士では，モチーフは共通している。たとえば，Weber と Fechner のモチーフは精神物理学関数，Wertheimer, Koffka, Köhler, Lewin の 4 人は，群化の要因という具合である。ここにあげた例からもわかるように，Wade のモチーフの選択は実に的確で，それが理解できたときには思わず笑みが浮かぶほど，機転の利いたものとなっている。

通常肖像画とモチーフは単純に重ね合わされているだけだが，統合の結果，興味深い視覚効果が生まれている知覚的肖像画も少なくない。たとえば，Locke のモチーフは矩形で，知覚的肖像画は，白っぽい半透明な矩形が Locke の顔を一部覆っているように見える。これは，現象的透明視の一例で，顔と矩形の層化と，下に知覚される顔の全体が明らかになっていること，つまり顔のモーダル完結が特徴である。この透明視現象には，1 つ興味深い点がある。通常の透明視では，知覚的重なりは部分的であり，覆って見える対象も覆われて見える対象も重なっている以外の領域を有しているが，この Locke の知覚的肖像画では，覆いとなっている矩形が全体として顔を覆っているように知覚されるのである。また，Titchener では，大きさ対比の錯視がモチーフになっており，肖像はまるで穴を通して部分的に見られるかのようになっている。つまり，モチーフである 14 個の円は穴に知覚され，その穴の存在する面と肖像の存在する面は，奥行き上で現象的に分岐する。しかしこの場合は，Locke のところで見られた透明視と異なり，Titchener の顔は全体像が明らかではない。顔は，穴の向こう側で，アモーダルに完結している。この肖像のアモーダル完結は，モチーフに等間隔に並んだ線分や曲線を用いた知覚的肖像画によく見られる。たとえば，Purkinje の知覚的肖像画は，一見，ただの同心円の集合にしか見えないが，本を離して図を眺めると，同心円の下に顔があるのがわかる。また，モチーフとして文字が用いられている場合も多く，その中には，肖像画が主観的面により表現されているものもある。Darwin や Pearson が，その例である。

このような知覚的肖像画を，Wade は芸術の科学への貢献の一例という。確かに，一般的な肖像画や写真よりも，この知覚的肖像画は，読者の注意と関心を集めやすいだろう。図説心理学史は，近年他にも出版されているが (Brožek, 1994), Wade の本は，図が他のものと比べるとかなり特徴的である。

同書の構成

この本では，各研究者の解説に，2 ページが割かれている。見開きの左側に知覚的肖像画，右側には，絵のタイトルとその研究者についての文章による説明がある。また，このタイトルも知覚的肖像画のモチーフ同様，この研究者を的確に表わしている。肖像画やモチーフの出典は，左ページの下方部分に明記されている。本文中の括弧内の文章は，その研究者の著書からの引用で，この出典は巻末にまとめて記載されている。

紹介人物の選択基準として Wade は，次の3点をあげている。まず，故人であること。次に，幅広く心理学に影響を及ぼした者であること。最後に，心理学を経験の科学たらしめることに貢献した者ということである。序の部分では，科学史が簡単に概観されている。いわゆる科学ルネッサンス以前は，Aristotle の三段論法が哲学の方法論の中心となっていた。その風潮の中，事実の蓄積と比較から原因を探る帰納的方法を唱えた Bacon から，Wade は解説を始めている。ちなみに，最後に紹介されているのは，視覚の計算理論のパイオニアとして知られる Marr である。

同書の特筆すべき箇所

この Wade の本の特徴は，これまでに述べたように，肖像画を用いた人物列記により心理学史の理解を図った点と，肖像画が通常のものとかなり異なった形式をとっている点にある。これより，以下の3つのことが言えるであろう。

まず，これは，心理学史研究への巧みないざないとなりうる。知覚的肖像画にはモチーフがあるから，その研究者のモチーフが何であるのか，なぜそれがモチーフにされたのかを知ろうとすることで，心理学史研究への関心が広がるであろう。特に，これから心理学史を学ぼうとする者にとっては，うってつけのテキストである。第2に，知覚的肖像画には，先に述べたような視覚効果が随所に見られることから，視覚効果のカタログ的役割も有している。Wade 自身は，このような効果について，特に個別的な説明はしていない。しかしこれらの現象は，知覚研究の分野では，現在もさまざまなアプローチから研究が進められているもので，理論的問題もはらんでいる。最後に，大変ナイーブな見方をすれば，この本は，ただ眺めているだけでも十分楽しいものと言える。

ところで，この本の中で，論議の対象になると思われる点は，知覚的肖像画という用語であろう。この肖像画に，なぜ知覚的という言葉を足したのかについて，Wade は明言していない。考え方によっては，あらゆる絵画は知覚的と言えるので，この用語の使用は適当ではないという批判もおこるかもしれない。知覚的肖像画では，肖像は間接的に描かれている。ここで，彼の言う視覚的比喩 (visual allusion) の概念が，重要な意味を持つことになる。Wade はこれを，"symbolic reference" と定義している (Wade, 1991, p. 1)。今回の知覚的肖像画は，視覚的比喩の一例であり，人物とモチーフ，視覚的効果が間接的に表現されている。知覚的肖像画は，単にその人の外見を表わすだけでなく，その個人の心理学への歴的段貢献を表わし，さらに，視覚的効果までが付け加えられている。通常の言語的比喩の解釈が読者に委ねられているのと同じように，知覚的肖像画から引き出される情報は，それを見る人によって異なるものとなろう。

以上が，Wade の *Psychologists in Word and Image* の特徴である。最後に，全く個人的見解ではあるが，同書には1つ大きな問題点があると思われる。知覚的肖像画は，一種のオップアートなのである。したがって，長時間見つめていると目が回り，気分が悪くなってしまうこともある。

引用文献

Brožek, J. (1994) Review of H. E. Lueck and R. Miller, Eds., Illustrierte Geschichte der Psychologie, 1993. Journal of the History of the Behavioral Sciences, 30, 302–304.

Mecacci, L. (1994) *Storia della psicologia del Novecento*. 4th ed. Bari: Laterza.

坂根巌夫 (1982) 新・遊びの博物館 朝日新聞社.

坂根巌夫 (編) (1984) ひろがる知覚世界「遊びの博物館」PART II カタログ 朝日新聞社.

Vicario, G. B. (1994) *Psicologia generale*. Padova: Cleup Editrice.

Wade, N. (1982) *The art and science of visual illusions*. London: Routledge & Kegan Paul.

Wade, N. (1983) *Brewster and Wheatstone on vision*. London: Academic Press.

Wade, N. (1990) *Visual allusions pictures of perception*. London: Earlbaum.

ウェイド, N. 著, 近藤倫明・原口雅浩・柳田多聞訳 (1989) ビジュアル・イリュージョン, 芸術と心理学の融合. 誠信書房.

ウェイド, N. 著, 近藤倫明訳 (1991) ビジュアル・アリュージョン, 知覚における絵画の意味. ナカニシヤ出版.

Wade, N. (1995) Quasi-perceptual margins. *Japanese Psychological Research*, 37, 115.